

# 鈴熊山遺跡

福岡県築上郡吉富町所在鈴熊山遺跡の調査

吉富町文化財調査報告書

第4集

1999

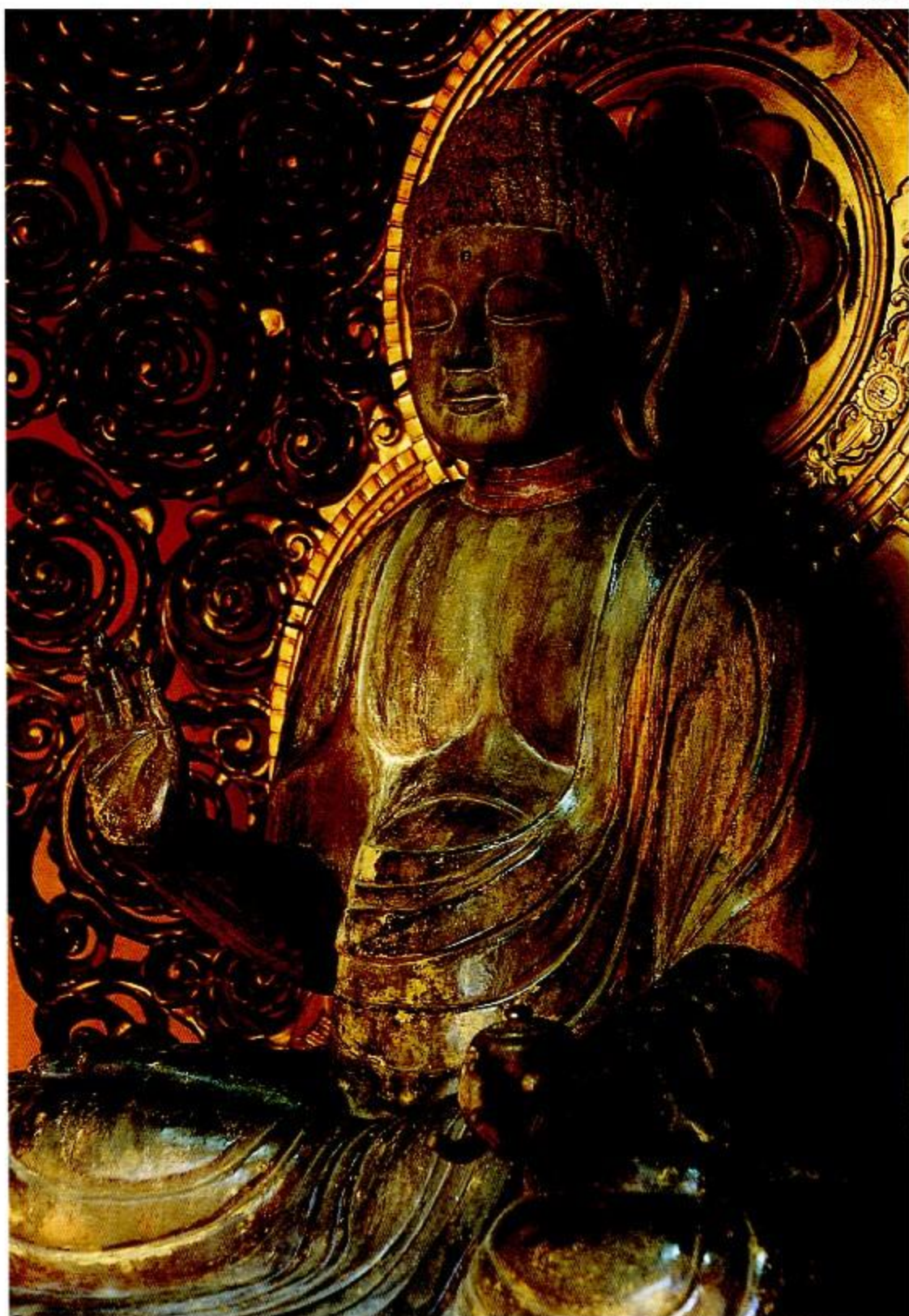
吉富町教育委員会

# 鈴熊山遺跡

福岡県築上郡吉富町所在鈴熊山遺跡の調査

吉富町文化財調査報告書

第4集

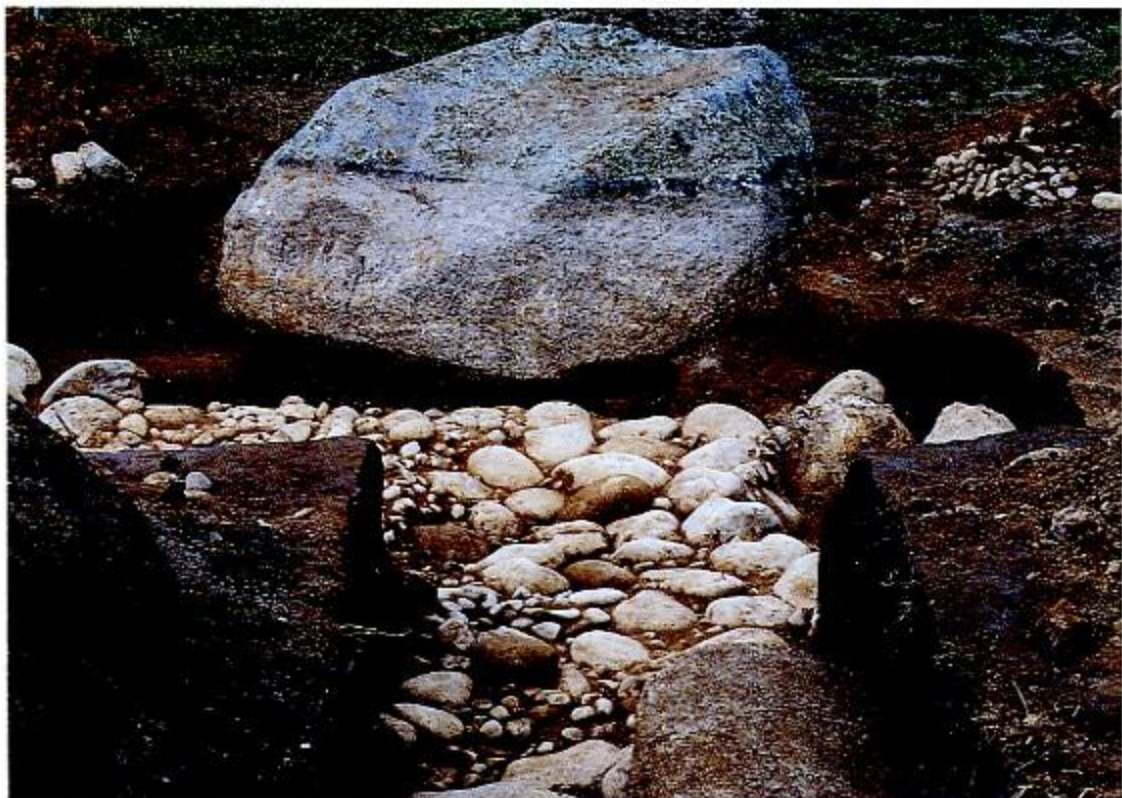


鈴熊寺 薬師如来坐像（重要文化財(有形彫刻)）

高さ86.4cm。蓮台上に結跏趺坐し、右手は施無畏の印を結び、左掌に薬合をいだかせる一木彫の像。白毫は水晶嵌入、目は伏目だが上縁を二段に彫る特異な手法がみられる。鎌倉初期の作らしい。



a 鈴熊山全景（南東から）



b 鈴熊四ツ枝1号墳石室

## 序

吉富町には、古代文化を物語る貴重な遺跡が丘陵地を中心に数多く存在していましたが、住環境の整備等に伴い、遺跡も失われつつあります。なかでも鈴熊山は、緑と歴史の共存する地域資源として親しまれ、現存する文化財包蔵地として後世に伝えるべく貴重な文化遺産であります。

平成7年度から、鈴熊山公園整備計画に伴う確認調査を行いました。この調査により、掘立柱建物跡ならびに主体部が崩壊している横穴式古墳など数多くの遺構と銅製釦、耳環等の装飾品を検出することができました。

本書は、この度の鈴熊山遺跡発掘調査の内容を収録したもので、郷土史を探るうえでの一資料、あるいは文化財に対するご理解を深めていただくための一助になれば幸いです。

なお、発掘調査及び本書刊行にあたり、ご指導、ご援助を賜りました福岡県教育庁文化財保護課、また、厳しい作業環境のなかで発掘調査に従事していただいた作業員の方々ならびに文化財に対する深いご理解とご協力をいただいた地元関係者各位に、心より感謝申し上げます。

平成11年3月31日

吉富町教育委員会

教育長 守口郁文

## 例 言

1. 本書は、福岡県築上郡吉富町教育委員会が事業主体となって実施した町内遺跡の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査・報告書作製は、大部分を国および福岡県の補助事業として、福岡県教育庁指導第二部文化課（現総務部文化財保護課）、同京築教育事務所の協力を得て実施した。
3. 出土遺物は、福岡県立九州歴史資料館において、土器類を福岡県文化財保護課岩瀬正信の、金属器を福岡県立九州歴史資料館学芸二課長横田義章氏の指導の下で、整理・復原を行った。
4. 掲載した図は、遺構を川野礼子・高畑由美子・小木戸美由紀・時本晴美・小池・飛野が、遺物は大野愛里・辻啓子・西田美代子・原富子・岡泰子・小池・飛野が作製し、豊福弥生・原カヨ子が製図を行った。
5. 掲載した写真は、遺構を飛野・小池が、遺物は九州歴史資料館において同館参事補佐石丸洋氏の指導の下、文化財保護課北岡伸一氏が撮影したものを使用した。
6. 使用した方位は第1～5地点が主として磁北、第6～10地点は座標北である。それ以外については特記した。
7. 本書の執筆は別府真二・飛野・小池が行い、編集は小池がこれにあたった。

## 本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	5
III. 調査の内容	9
1) 第1地点	9
2) 第2地点	13
3) 第3地点	14
4) 第4地点	20
5) 第5地点	24
6) 第6地点	31
7) 第7地点	34
8) 第8・9地点	38
9) 第10地点	41
IV. おわりに	48

## 図版目次

巻頭図版1	鈴熊寺 薬師如来坐像 (重要文化財 (有形彫刻))	
	2a; 鈴熊山全景 (南東から)	b; 鈴熊四ツ枝1号墳石室
図版1	鈴熊山周辺航空写真	
図版2	1; 第1地点全景 (伐開前、南西から)	2; 同 (伐開後、南西から)
	3; 第1-a地点巨石群 (東から)	4; 同 (西から)
図版3	1; 第1-b地点全景 (北から)	2; 同古墳盛土 (北東から)
	3; 同トレンチ全景 (北から)	
図版4	1; 第1-b地点トレンチ石材検出状態 (南から)	
	2; 同 (南から)	3; 同 (北から)
図版5	1; 第1-b地点トレンチ北半 (南東から)	2; 第2地点トレンチ全景 (南東から)
	3; 同 (南から)	
図版6	1; 第2地点溝状遺構土層 (北東から)	2; 同 (南東から)
	3; 同 (南東から)	4; 第3地点全景 (東から)
図版7	1; 第3地点全景 (南から)	2; 同集石土坑 (南東から)
	3; 第4地点泉池状遺構 (北東から)	4; 第4地点全景 (南西から)
図版8	1; 第4-a地点南壁西半土層 (北から)	2; 同北壁土層 (南西から)
	3; 第4-a地点南壁東半土層 (北から)	4; 第4-b地点全景 (南から)
図版9	1; 第4-b地点全景 (北から)	2; 同c地点全景 (南から)
	3; 第5地点全景 (北から)	4; 第5地点全景 (南から)
図版10	1; 第5地点1号土坑 (東から)	2; 第5地点南区全景
	3; 同2号土坑 (西から)	4; 同3号土坑 (南西から)
図版11	第1~第3地点出土遺物	
図版12	第3~第5地点出土遺物	
図版13	1; 第6地点全景 (南から)	2; 第6地点調査区 (西から)
	3; 第6地点調査区堆積状況	
図版14	1; 第6地点柱穴状ピット (北から)	2; 第6地点攪乱土坑
	3; 第6地点調査風景	4; 出土遺物
図版15	1; 伐採後の第7地点 (南西から)	2; 伐採後の第7地点 (北から)
	3; 第7地点調査風景	
図版16	1; 第7地点階段と石垣	2; 石垣 (南から)
	3; 石垣 (南西から)	
図版17	1; 第7地点W3トレンチ (北から)	2; S2トレンチ (北から)
	3; E1トレンチ (北から)	4; 出土土器
図版18	1; 第8地点1トレンチ (北西から)	2; 2トレンチ (北西から)
	3; 3トレンチ (北西から)	4; 4トレンチ (北西から)
	5; 第9地点5トレンチ (北から)	
図版19	1; 第9地点6トレンチ (東から)	2; 7トレンチ (北から)
	3; 8トレンチ (北から)	4; 9トレンチ (西から)
	5; 5トレンチ出土遺物	
図版20	1; 第10地点全景 (南西から)	2; 四ツ枝1号墳石室掘形 (東から)
	3; 四ツ枝1号墳石室全景 (南から)	

- 図版21 1 ; 1号墳石室上部床面 (南から) 2 ; 1号墳石室下部床面 (北から)  
 3 ; 1号墳石室下部床面 (東から)
- 図版22 1 ; 1号墳石室床面遺物出土状況 2 ; 2号墳?トレンチ (南西から)  
 3 ; 1号墳出土遺物

## 挿 図 目 次

第1図	鈴熊山遺跡の位置 (1/5,000)	3
第2図	鈴熊山周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図	鈴熊山地形測量図 (1/1,000)	9
第4図	第1地点地形測量図 (1/200)	10
第5図	第1地点土層実測図 (1/60)	11
第6図	第1地点出土遺物実測図 (1/3)	12
第7図	第2地点土層実測図 (1/60)	13
第8図	第3地点遺構実測図 (1/50)	14
第9図	第3地点出土遺物実測図1 (1/3)	16
第10図	第3地点出土遺物実測図2 (1/3)	17
第11図	第3地点出土遺物実測図3 (1/3)	19
第12図	第4地点遺構配置図 (1/200)	21
第13図	第4地点土層実測図 (1/60・1/30)	22
第14図	第4地点出土遺物実測図 (1/3)	23
第15図	第5地点遺構配置図 (1/200)	25
第16図	第5地点掘立柱建物跡実測図 (1/60)	26
第17図	第5地点出土遺物実測図 (1/3)	27
第18図	第5地点土坑実測図 (1/40)	27
第19図	第5地点土坑出土遺物実測図 (1/3)	28
第20図	第5地点P2出土遺物実測図 (1/3)	29
第21図	第1～5地点出土石製品実測図 (1/8・1/4・1/2)	29
第22図	第6・7地点地形測量図 (1/200)	31
第23図	第6・7地点遺構実測図 (1/60)	32
第24図	第6地点出土遺物実測図 (1/3)	33
第25図	第7地点調査区実測図 (1/100)	35
第26図	第7地点出土遺物実測図 (1/3)	37
第27図	第8・9地点遺構・土層実測図 (1/60)	39
第28図	第8・9地点出土遺物実測図 (1/3)	40
第29図	出土石製品実測図 (1/5)	41
第30図	第10地点遺構配置図 (1/200)	42
第31図	第10地点トレンチ土層実測図 (1/60)	42
第32図	四ツ枝1号墳石室実測図 (1/60)	43
第33図	1号墳出土土器実測図1 (1/3)	45
第34図	1号墳出土土器実測図2 (1/3)	46
第35図	1号墳出土瓦実測図 (1/3)	46
第36図	1号墳出土鉄製品・石製品実測図 (1/2)	46
第37図	1号墳出土装身具類実測図 (1/1)	47
第38図	2号墳?出土遺物実測図 (1/3)	48



# I. 調査経過

## 1. 調査に至るまでの経緯

鈴熊山は、標高38m、南北長200m、南西長150m弱の独立丘陵地で、福岡県森林浴百選に選ばれるなど、緑と史跡の調和した地域住民の憩いの場として親しまれてきた。平成6年度に、自然と歴史に恵まれた地域資源を活用するとともに、住民のコミュニティ活動の拠点として位置づけるため、都市公園整備化が計画された。鈴熊山は、既に埋蔵文化財包蔵地として周知されており、同6年度から現地調査を実施し、故岡為造氏の記録との照合を行うとともに、公園整備主管課への確認調査および保存措置の必要性を要請した。

翌7年度には、遊歩道建設予定地等の確認調査を行い、大破した古墳1基と礎石建物跡を確認したため、計画路線の設計変更を含めた調整を図った。しかし、事業課の費用負担では鈴熊山の文化財を保護することが困難であろうと予想されたことから、次年度以降は保護を優先するために、国庫補助事業として申請し、採択された。

平成8年度からは「鈴熊山遺跡発掘調査」として国庫補助を受け、9月17日から本格的な発掘調査を開始した。鈴熊山遺跡の発掘調査は継続事業として3カ年実施し、平成10年7月10日をもって発掘調査を終了した。

また、周辺地域の宅地造成化が進むなか、鈴熊山東側に位置する住居地域内に巨石が地表に露出する田地があり、かつて同地より人骨等が発見されたとの経緯から、鈴熊山遺跡群として位置づけるうえでの性格・範囲を確認するため、田地の試掘調査を実施した。調査により横穴式石室を主体部とする円墳1基と主体部が未確認の古墳周溝を発見した。同地の字名から、鈴熊四ツ枝古墳群（1号・2号墳）という名称で周知の埋蔵文化財包蔵地として位置づけ、可能な範囲で保存の方向で調整を図りたい。

## 2. 調査の概要

平成6年度から5年間におよぶ調査概要は次のとおりである。

- |       |  |
|-------|--|
| 平成6年度 | ・事業計画図面による施工箇所の現地確認調査  |
| 平成7年度 | ・南側遊歩道建設箇所の発掘調査、東側参道付近の確認調査<br>大破した古墳、礎石建物跡らしき遺構を検出<br>(調査期間：7月19日～9月8日)                   |
| 平成8年度 | ・東側遊歩道建設箇所の発掘調査<br>掘立柱建物跡、掘込事業かと思われる遺構を検出<br>(調査期間：9月17日～11月14日、2月24日～3月17日)               |
| 平成9年度 | ・山頂遊具設置箇所の発掘調査、東側参道付近の追加調査、西側田地の確認調査等<br>古墳周溝を検出、礎石建物跡らしき遺構の等の規模確認調査<br>(調査期間：9月8日～10月31日) |

- 平成10年度 ・北側遊歩道設置箇所および西側田地遊具建設箇所の発掘調査  
土師質土器を含む遺構等を検出  
(調査期間：6月29日～7月13日)
- ・鈴熊山東側田地(四ツ枝古墳群)確認調査  
玄室(広さ2.0×2.5m)を主体部とする横穴式古墳1基、古墳周溝  
(調査期間：10月19日～11月2日)

### 3. 調査関係者

調査の関係者は以下のとおりである。

調査組織 吉富町教育委員会

調査責任者 吉富町教育委員会 教育長 高原 洋、 守口 郁文  
(～平成8年9月) (平成8年10月～)

教務課 課長 樋口 翌、 太田 治郎  
(～平成8年3月) (平成8年4月～)

課長補佐 山崎 榮子、 舛川 貞夫  
(～平成6年6月)  
大塚 和己  
(～平成9年3月)

係 長 江河 厚志、 瀬口 浩  
(平成7年7月～) (平成9年4月～)  
土屋 啓子、 太田 悦子  
(～平成7年7月) (～平成7年4月)  
田中 修  
(～平成7年6月)

係 員 曳汐 康浩、 岩井 保子  
(平成10年4月～)  
別府 真二、 安藤 緑  
(～平成10年3月)  
川端 元子、 石丸 順子  
(平成9年7月～) (～平成9年6月)

福岡県教育庁総務部文化財保護課

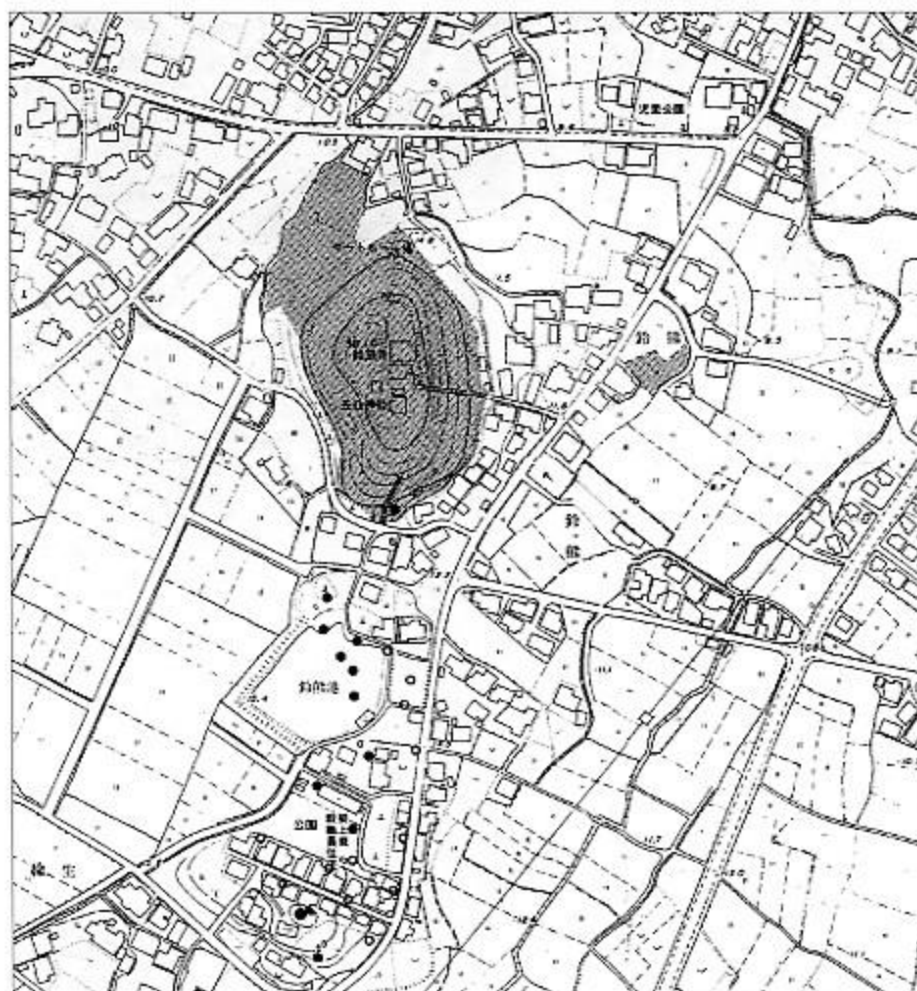
参事補佐 小池 史哲(平成9年4月～)  
主任技師 飛野 博文(～平成9年3月、現；技術主査)

調査作業員 磯田 範昭、高尾 智子、和才チヅ子、小出石信子  
 澤田 勇、太田 寿子、小林 豊彦、尾田 妙子  
 本間たけ子、矢頭 淑枝、下畑クニ子、川端ミサエ  
 澤田 末子、蔵本美佐子、佐々木啓次、守口シゲ子  
 上田 和子、永松キワ子、佐藤 信義、松下みえ子  
 中野里美、森口 幸子、増川ハスエ、小木戸美由紀  
 時本清美、下畑 久雄、四辻 敦子、土屋ハルカ  
 今西 眞守、澤田 幹義

調査にあたり鈴熊自治会長の磯田正信氏、磯田五孝氏、野中重明氏、梅田清子氏をはじめとする地元の方々には、多大なるご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

また発掘作業においては、調査箇所での不便さ、炎天下等での作業にもかかわらず発掘調査に従事された作業員の方々には、並々ならぬご尽力を賜った。記して謝意を申し上げます。

(別府 頁二)



第1図 鈴熊山遺跡の位置 (1/5,000) アミ部分が調査地、丸印は輪生山・茶臼山古墳群



## Ⅱ. 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

鈴熊山（Suzukumayama）遺跡は、福岡県築上郡吉富町大字鈴熊小字鈴熊山にあり、東経 131° 10′ 5″、北緯 33° 36′ 4″ 付近に相当する。英彦山や耶馬溪の水を集めて周防灘に注ぐ山国川が形成する中津平野の扇状地堆積面には、約7～9万年前に噴出した阿蘇4火砕流が玖珠・耶馬溪を通じて流入して堆積することや、先端部で海成砂が確認されていて、7～9万年前以前の海進期に形成されたと考えられている。山国川本流沿いの沖積地には自然堤防も発達するが、犬ヶ岳（1130.8m）・雁又山などに源を発する佐井川・岩岳川流域にも扇状地が広がり、佐井川との間に挟まれた位置にある鈴熊山は山国川・佐井川下流域の花崗岩質岩盤および風化土からなる残丘状の小丘地形である（註1）。

### 2. 歴史的環境

吉富町を含む旧上毛郡や隣接する中津・旧下毛郡地域での遺跡・遺物に対しては、古くから注目されてきたが、明治42年には岡為造が求菩提山の経筒を『考古界』に紹介している（註2）。大正2年に弘津史文・吉村鉄臣によって調査された（註3）大平村友枝瓦窯跡は柴田常恵の調査などを経て内務省の史跡指定を受けている。第二次大戦までは弘津史文・森貞次郎・森本六爾ら中央での考古学雑誌所収文献がみられ、地元では岡為造や久持恒雄らによって収集された資料がある（註4）。戦後の昭和20年代には鏡山猛・渡辺正気によって新吉富村垂水遺跡（註5）、賀川光夫によって中津市相原廃寺（註6）・植野貝塚（註7）など考古学的な発掘調査が実施されるようになった。40年代後半には全国的に遺跡分布地図作成が進められ、遺跡・遺物の新発見・再確認が進められたが、近年は国道10号北大道路整備や、圃場整備事業などの大規模開発などに伴う発掘調査が増加し、先史・古代・中近世などの遺構・遺物が急激に増加している状況にある。

旧石器時代の遺跡としては、中津市大坪遺跡、大平村上の熊遺跡・桑野遺跡・金居塚遺跡・豊前市青畑遺跡向原遺跡などでナイフ形石器や細石刃核などの旧石器が出土している（註8）。

縄文時代早期の遺跡では豊前市吉木遺跡で押型文土器がまとまって出土した（註9）が、垂水遺跡や宇野代遺跡などでも数点出土しており今後発見例が増加するであろう。60年代には椎田町山崎・石町遺跡で後期の住居跡群が発見され、土器埋設の複式炉が存在するなど注目される調査であったが（註10）、引き続き大平村の上唐原遺跡（註11）・原井三ッ江遺跡（註12）・土佐井遺跡（註13）・東友枝曾根遺跡（註14）、豊前市小石原泉遺跡（註15）、三光村佐知遺跡（註16）などで後期住居跡の発見例が急増した。住居形態では方形プランで石囲炉をもつものから、円形プラン化して炉に土器埋設複式炉・地床炉などが出現し石囲炉が消滅するなどの傾向が窺える（註17）。これらの遺跡は自然堤防上や河岸段丘上に立地するが、中津市上万田遺跡・高瀬遺跡・高畑遺跡、大平村川下遺跡（註18）などは後・晩期の遺物を出土させる山国川自然堤防上の遺跡である。

弥生時代では、昭和52年に新吉富村中桑野遺跡で前期末から中期末の集落跡が発掘調査されたが（註19）、隣接する牛頭天王遺跡で平成5年に中期の大型建物跡などが発見された（註20）。山国川に面する崖上に聳え、中津平野・周防灘を眺望する建物が想像されよう。このほか新吉富村尻高畑田遺跡（註21）・大平村土佐井ミソンデ遺跡（註22）・桑野遺跡（註23）・下唐原伊柳遺跡（註24）・下唐原宮

園遺跡(註25)・郷ヶ原遺跡(註26)などで住居跡や建物跡が発見されている。墓地としては中期の方形墳丘墓が調査された大塚本遺跡(註27)、終末頃の石蓋土壙墓群の穴ヶ葉山遺跡(註28)などがある。

古墳時代の集落も引き続き山国川自然堤防上の各遺跡や扇状地上の平坦部にみられる。5世紀頃からカマド付きの住居が出現し、なかには住居跡内壁に沿って煙道がのびる所謂オンドルタイプの例も小石原泉遺跡などで発見されている。墳墓では古式の前方後円墳である大平村能満寺古墳(註29)や、中津市勘助野地遺跡の小型方形墳と土壙墓群(註30)などはともに山国川を挟んで河岸段丘状に延びる丘陵先端部に位置する。吉富町内では5世紀代の古墳として楡生山前方後円墳(註31)、6世紀の古墳として天仲寺・広運寺古墳(註32)が海岸部の要衝の地に占地している。また群集墳は、大平村上の熊古墳群(註33)・穴ヶ葉山古墳群(註34)・金居塚古墳群(註35)、新吉富村桑野題古墳群(註36)・宇野台古墳群(註37)・宇野代遺跡・大塚本遺跡(註38)、など多数知られており、横穴墓でも三光村上ノ原横穴群(註39)・大平村百留横穴群・金居塚横穴群などが知られる。須恵器生産地としての窯跡が新吉富村山田窯跡群・照日窯跡群(註40)や中津市伊藤田窯跡群(註41)などにみられ、大平村友枝瓦窯跡(註42)などを含めて6世紀から9世紀までの採業が確認される。

律令期では新吉富村の垂水廃寺(註43)・中津市相原廃寺(註44)が古くから注目されてきたが、近年三光村塔ノ熊廃寺(註45)のほか、上毛郡衙跡として大ノ瀬官衙遺跡(註46)、下毛郡衙跡として中津市長者屋敷遺跡が調査され、大ノ瀬官衙遺跡は昨年末に国史跡に指定された。また大ノ瀬官衙遺跡や垂水地区遺跡で官道跡らしい遺構も確認され(註47)、古代官道は垂水廃寺推定地北側・牛頭天王遺跡北側を経て相原廃寺北側を通ると推定されている。また正倉院に残る大宝二年残簡戸籍の「豊前國上三毛郡塔里」は大平村唐原付近に想定され、渡来系の姓が多いと指摘されている(註48)。

平安期後半にはこの地域一帯が宇佐八幡宮・弥勒寺の荘園などで占められる。また山国川河口の要衝地であることから平安末期には源経基が広津城を築いている。鎌倉時代には豊前国地頭職に任じられた宇都宮信房をはじめとする宇都宮氏一族が勢力を振るい、郡司(郷司)クラスで田部氏・広津氏らの名がみえる。その後大内氏・大友氏・毛利氏などの攻防に関連しているが、戦国期には広津氏の名がみえる。

豊臣秀吉の九州平定以降は黒田孝高、細川忠興・忠利、小笠原長次らに封じられる。吉富は山国川に接した位置的条件などから生活圏としては中津圏であり、小倉街道(下往還)が貫き、山国川には小犬丸や広津の渡しがあったという。

鈴熊山にある鈴熊寺は、寺伝によれば金華山惣持院鈴熊寺として天平6(734)年に創建されたとされる。宇佐八幡宮司公兼公が参籠したと『宇佐宮寺造営日記』の応永三十二年(1425)の条に記述されることから寺院として隆盛していたことが窺われる。なお明治39年4月には八幡古表神社の木造女神騎牛像とともに、鈴熊寺の木造薬師如来坐像が国宝に指定(現在は有形彫刻の重要文化財に変更)されている。(小池 史哲)

- 註 1 地質については、福岡県 1971 土地分類基本調査「中津」周防灘周辺開発区域によるところが多い。
- 2 岡為造 1909 豊前求菩提山国魂神社藏経筒 考古界 第8篇第2号 東京
  - 3 弘津史文 1924 豊前国友枝村瓦窯より発見の古瓦 考古学雑誌 第14巻第13号 東京
  - 4 小田富士雄編 1983 岡為造氏収集考古資料集成 吉富町教育委員会
  - 5 渡辺正気 1983 福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告 古文化談叢 第11集 北九州
  - 6 賀川光夫 1955 豊前中津市相原庵寺調査報告 中津市教育委員会
  - 7 賀川光夫 1957 大分縣(豊前)中津市植野貝塚調査報告 中津市教育委員会
  - 8 小池史哲 1993 豊前地方の旧石器時代遺跡 豊前市史 考古資料 豊前市
  - 9 高橋章編 1989 吉木遺跡 福岡県文化財調査報告書 第84集
  - 10 小池史哲編 1992 山崎遺跡(I)・石町遺跡 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告7ー 福岡県教育委員会
  - 11 小池史哲編 1996 上唐原遺跡(II) 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集
  - 12 小池史哲 1989 原井三ツ江遺跡 大平村文化財調査報告書 第5集
  - 13 高橋章編 1990 土佐井地区遺跡 大平村文化財調査報告書 第6集
  - 14 小池史哲・末永浩一 1999 大平村東友枝曾根遺跡の調査 考古学ジャーナル 443号 東京
  - 15 小池史哲 1993 豊前地方の縄文時代遺跡 豊前市史 考古資料 豊前市
  - 16 坂本嘉弘編 1989 佐知遺跡 大分県文化財調査報告書 第81輯
  - 17 小池史哲 1993 豊前地域の縄文後期住居跡 古文化談叢 第30集(下) 北九州
  - 18 宮本工他 1984 山国川流域における縄文時代後・晩期の遺跡 九州考古学 59 福岡
  - 19 馬田弘稔編 1978 中桑野遺跡 新吉富村文化財調査報告書 第3集
  - 20 飛野博文編 1994 牛頭天王遺跡 新吉富村文化財調査報告書 第8集
  - 21 緒方泉 1992 尻高畑田遺跡 新吉富村文化財調査報告書 第7集
  - 22 伊崎俊秋 1991 土佐井ミソナデ遺跡 大平村文化財調査報告書 第7集
  - 23 杉原敏之編 1997 三ツ溝・長田・桑野遺跡 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集
  - 24 大平村教育委員会が、圃場整備事業に伴い平成10年度に発掘調査を実施。大平村教育委員会の末永浩一氏のご教示による
  - 25 吉田東明編 1998 下唐原宮園遺跡 山国川築堤改修関係埋蔵文化財調査報告2
  - 26 飛野博文編 1998 郷ヶ原遺跡 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集
  - 27 小川泰樹編 1998 大塚本遺跡 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第9集
  - 28 飛野博文 1993 穴ヶ葉山遺跡 大平村文化財調査報告書 第8集
  - 29 飛野博文 1994 能満寺古墳 大平村文化財調査報告書 第9集
  - 30 渋谷忠章編 1988 一般国道10号線中津バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
  - 31 伊崎俊秋 1991 楡生山古墳 吉富町文化財調査報告書 第3集
  - 32 酒井仁夫 1983 天仲寺・広運寺古墳 吉富町文化財調査報告書 第1集
  - 33 上野精志・小池史哲 1978 上ノ熊古墳群 大平村文化財調査報告書 第1集
  - 34 酒井仁夫 1985 穴ヶ葉山古墳群 大平村文化財調査報告書 第3集
  - 35 飛野博文編 1996・1997 金居塚遺跡I・II 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4・7集
  - 36 高橋章 1989 桑野廻古墳 新吉富村文化財調査報告書 第4集
  - 37 高橋章 1990 宇野台古墳 新吉富村文化財調査報告書 第5集
  - 38 小川泰樹編 1995 宇野代遺跡 一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 福岡県教育委員会
  - 39 村上久和編 1989・1991 上ノ原横穴墓群I・II 一般国道10号線中津バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告
  - 40 池辺元明・飛野博文編 1995 照日遺跡群 新吉富村文化財調査報告書 第9集 新吉富村教育委員会
  - 41 栗焼憲児編 1985 伊藤田城山窯跡群 中津市文化財調査報告 第5集
  - 42 高橋章編 1976 友枝瓦窯跡 大平村教育委員会

- 43 森田勉編 1976 垂水廃寺 新吉富村文化財調査報告書 第2集  
 44 栗焼憲見 1989～91 相原廃寺Ⅰ～Ⅲ 中津市文化財調査報告 第7・8・10集  
 45 村上久和・吉田寛 1989 三光村の遺跡 三光村文化財調査報告書 第1集  
 46 矢野和昭 1997・1998 大ノ瀬下大坪遺跡Ⅰ～Ⅲ 新吉富村文化財調査報告書 第10・11集  
 47 池辺元明・杉原敏之編 1996 池ノ口遺跡 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集 福岡県教育委員会  
 48 小田富士雄 1991・1993 秦氏の入豊と大宝の戸籍 豊前市史 上巻・考古資料 豊前市



#### 木造十一面観音菩薩坐像（町指定、有形文化財彫刻）

松材の寄木造りで、本面上に一〇面（前中央の一面欠失）の小化仏をもち、二臂で、総高73cm、仏丈56cm、玉眼は嵌込み、像全面に漆箔を残しており、銅製の宝冠を戴き、胸飾りのある、つり合いのとれた坐像である。

衣文や顔貌の表現で、中国彫刻移入以後の特徴をもつことから、南北朝期から室町時代初期の作とみられる。

像容は、頭部本面の上に十一面の小面があり、前三面は菩薩面（慈悲の相）・左三面は瞋怒面（怒りの相）・右三面は狗牙面（白牙上出の相）・後一面は暴悪笑面（大笑いの相）・頂上中央に仏陀（阿彌陀如来）を奉じ、二臂の右手に念珠、左手に蓮華を挿した水瓶を持って、衆生を救う誓願を表しているのが一般的である。



鈴熊寺の文化財

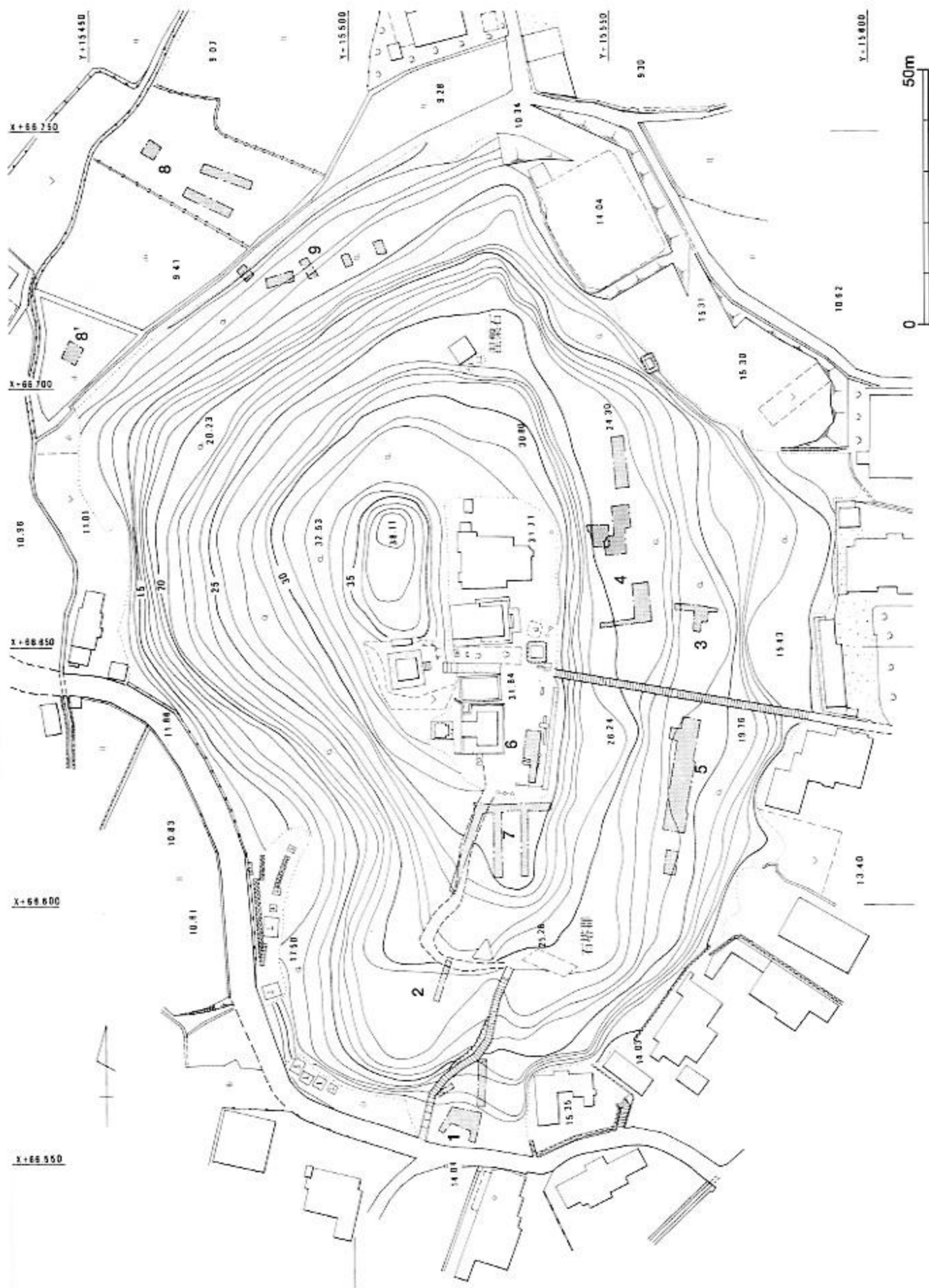
#### 涅槃石（町指定史跡）

北方山腹にあり、高さ2m、横3mの巨石の中央に、身長70cmの釈迦が頭を北にして身を右下にして横たえ、周囲に悲しい表情をした弟子達、右上方に釈迦の母摩耶夫人が侍女を従え雲に乗り、釈迦を救う業を持って下る様子が浮彫りされている。

この像は、鈴熊寺中興の祖ともいわれる、天台宗の僧午道法印が中津藩主のすすめで、文政六年（1823）に、豊前国宇佐郡桂昌寺より鈴熊に移住し、寺の本堂、庫裏などを再建し、巨石の下に法華經一字一石を埋めて、手ずから彫刻したと伝えられている。

（吉富町文化財協議会1986 吉富町の文化財）





第 3 圖 錦熊山地形測量圖 (1/1,000)

### Ⅲ. 調査の内容

今回の発掘調査は主として園路・平坦地を造成する部分について実施した。掘削が伴うのは主として園路の造成であるが、遺構が掘削される部分については導線の変更あるいは極力掘削範囲を狭めるよう事業課の協力を得ることができた。また、広場造成地については基本的に盛土で処理されることから、遺構深度に配慮するよう要請した。

#### 1) 第1地点

南参道の東側に位置する。かつて岡為造氏によって作製された古墳の分布図ではこの付近に古墳が記されている。町道脇の土取りされた部分に巨石が散乱していることからその石材の性格を確認するために開けた試掘溝（1-a地点）、そしてその上段の旧地形を保つかに見える部分に開けた1-b地点、参道に接して石材が露出した部分に開けた小規模な試掘溝（1-c地点）を設定した。

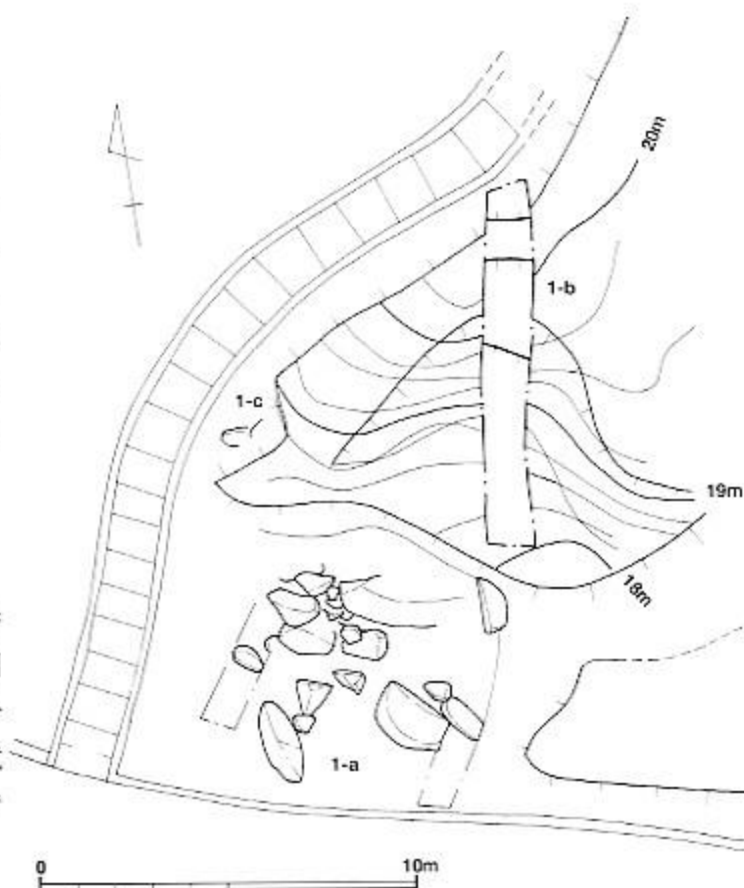
##### 1-a地点（図版2、第4図）

巨石が散乱した状況からその並びを見るために試掘溝を開けた。ここはゴミ捨て場として利用されており、若干の須恵器甕片を採集したものの、遺構と認められるものはなかった。散在する巨石の一部は古墳の主体部を構成していた可能性もあるが、多くは地山（花崗岩バイラン土）に含まれるものと判断された。

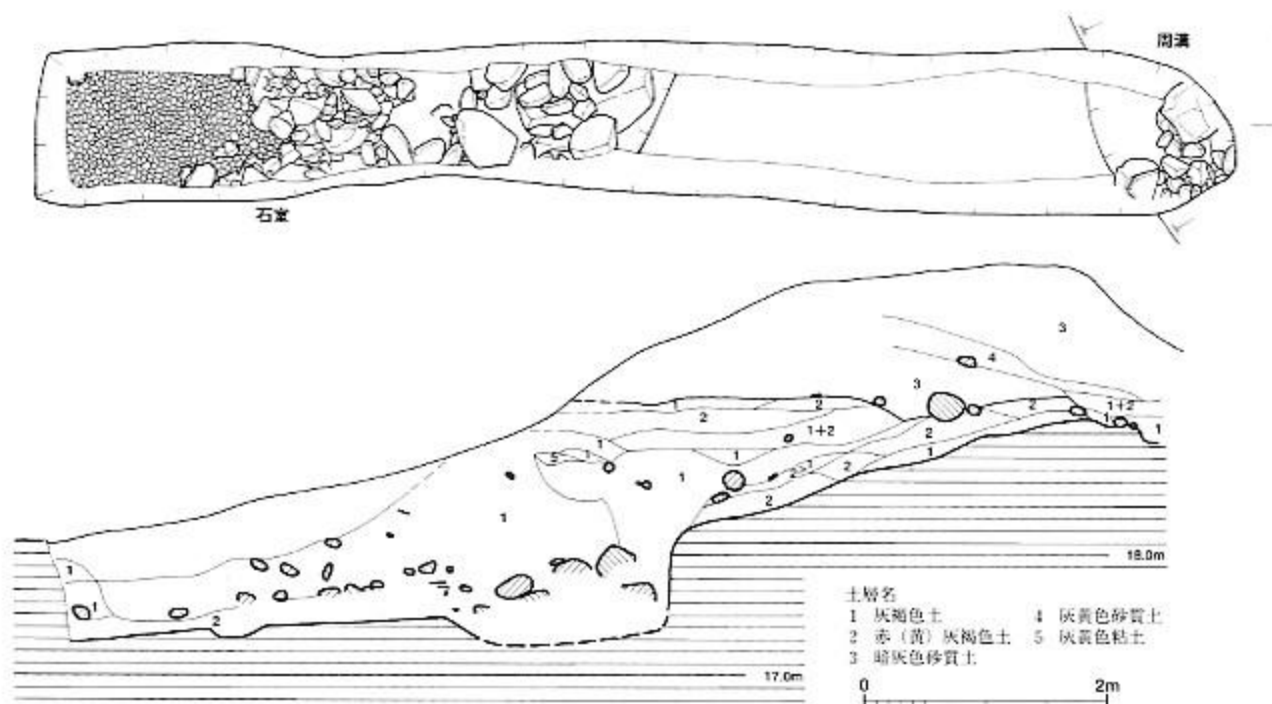
##### 1-b地点（図版2～5、第4・5図）

1-a地点の上方に開けた試掘溝。参道や土取り、そして住宅造成地に囲まれていて、試掘溝を設定した部分は緩く窪地となっていた。なお、試掘溝は幅約1.2m、長さ10mの規模である。

##### 土層観察



第4図 第1地点地形測量図（1/200）



第5図 第1地点土層実測図(1/60)

最高所は標高20.3mほどに位置し、南へ向かって緩やかに下降する。北は参道で開削される。この最高所付近では標高19.3m付近まで参道開削時に盛られたと考えられる盛土が覆っている。それ以下は通有の古墳に見られると同様な灰褐色・黄(灰)褐色土で積み上げられた盛土が観察できた。この試掘溝の北端、参道法面のやや南で地山の落ちを検出したが、これが周溝の肩と思われる。往々にして見られるように、蛇行する参道の形状は古墳の周溝をトレースしたものと思われる。

また、石室の残骸も検出できた。石材が乱雑に散乱し、その南には径数cmの玉石が広く見られたが、玉石の下位にも黒色土が薄く堆積していて、それらも攪乱されていることが判る。

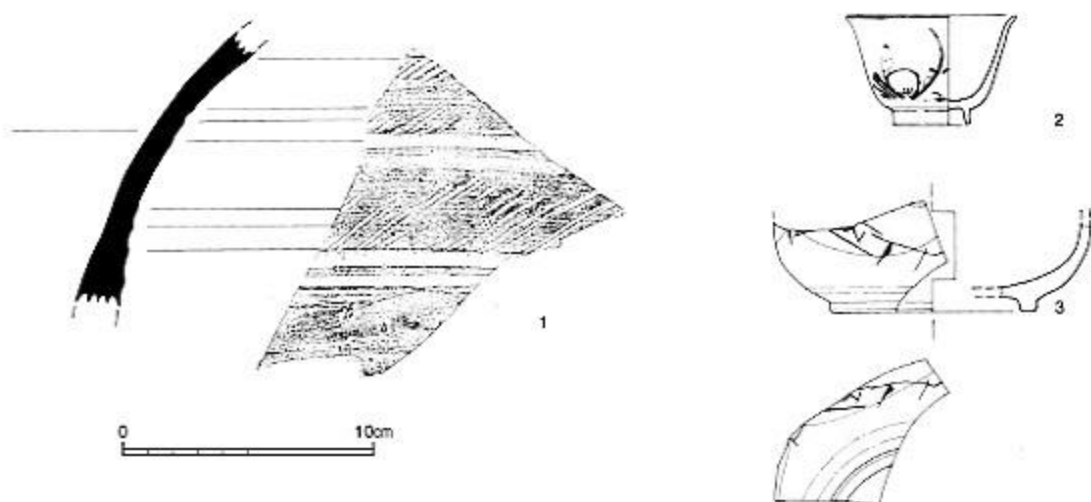
掘形の肩から玉石の散乱する南端までの距離は4.8mを測るが、なお対辺の掘形は見えていない。徹底的に破壊された可能性も否定しきれないが、この距離から判断して検出した掘形が奥壁のものとするのが妥当であろう。

#### 1-c地点(第4図)

参道右側の地形が張り出した部分で石材を認めたことから設定した幅1m弱、長さ2m弱の小トレンチ。図示していないが、地山直上に二次堆積と思われる灰黒色土が、その上にこれも再堆積と思われる灰黄褐色土がのっていた。結局、このトレンチでは古墳墳丘に関するデータを得られなかった。

#### 出土遺物

古墳に関する遺物は須恵器甕がほとんどで、しかも体部片が多いため1点を図示したのみである。



第6図 第1地点出土遺物実測図 (1/3)

### 須恵器 (第6図1)

1はc地点小トレンチから出土した須恵器頸部片。幅広の凹線を2条単位でめぐらせて文様帯を画し、間にカキ目原体を押圧して文様を付す。施文は不連続部分が多く、また不規則で粗雑なものである。胎土は比較的精良で、焼成も良好である。

### 陶器 (図版11、第6図3)

3はb地点トレンチ表土出土である。小片で不明な部分もあるが高台が正円を描き、体部に面をもつ。釉は白色透明釉で外面のみ施され、体部下端に及ばない。施文は茶褐色～黒褐色に発色し、直線的な紋様が付される。また、釉下端部の下位にやはり黄白色の化粧土が見られる(図で不連続に表現した線)。素地は外面が黄白色、内面が灰黄色に発色する。

### 染付 (第6図2)

2はb地点トレンチ下層出土。高台畳付付近を除いて乳白色の不透明釉を施し、濃青色のくすんだ描線で文様を描く。内面は無文である。

## 小 結

bトレンチで検出した石材が横穴式石室の残骸であることは間違いなからう。丁度、岡為造氏が図示した位置に相当する。しかし、盛土を確認しただけで、石室の構造そのものは不明のままである。地山近くに散乱した玉砂利が床面に敷かれていたものと思われるが、この地域の通常の後期古墳では大振りの河原石を敷き詰めた上に玉砂利を敷くことが多く、玉石だけを使用するのは時期的に遡るものと考えられる。

一方、わずかに1点であるが、須恵器甕の頸部残片は、6世紀後半と呼ぶ範囲を遡ることはないと考えられ、先の玉砂利の存在が気になるものの、この古墳も横穴式石室を主体部とするものであったと思われる。

## 2) 第2地点

第1地点の北西、比較的平坦な地形が広がる部分に位置する。展望所が設置される予定地であるが、客土を行うとのことで遺構の有無・深度を確認することを目的とした。この付近は雑木が茂っていたが、上記の理由から全面の伐開を行わず、試掘溝発掘に支障のない範囲で切り開いた。

略南北方向に幅約1m、長さ8.5mの試掘溝を設定した。ちなみに、この試掘溝の北端は踏み分けただけの現参道で、さらに北はかなりの急傾斜になるとともに、参道に接して巨石が数基置かれて(?)いる。

### 土層観察 (図版5・6、第7図)

北から南に向かって緩やかに地山が傾斜し、その標高は約25m、地表から0.3~0.8mの深さであった。その間の堆積層は混ざりのないパイラン土であることから自然になされたものであろう。

試掘溝の北寄りでは、ほぼ地表面から掘り込む幅2.4m、深さ0.5mの断面U字形の浅い掘り込みが検出された。この下位にのみ比較的粘質の土が埋土として確認され、かつその上面がかなり平坦な面となることから、これは参道を整備する以前の旧参道である可能性がある。

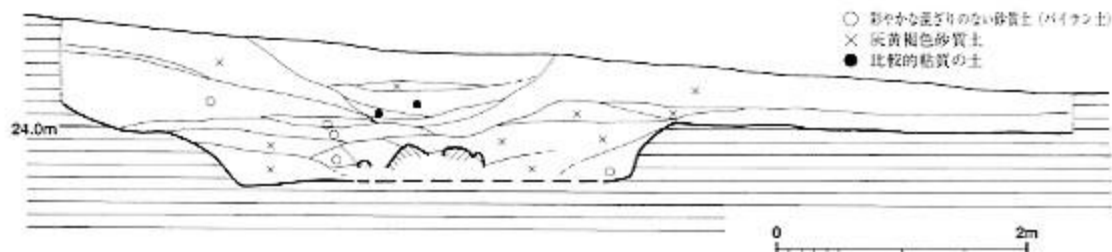
また、自然堆積層と思われる土層を除去して地山に達したところで、幅約4m、深さ0.4m強の断面逆台形の溝状遺構を検出した。その中央部、溝上面に近い部分に大小の多くの石材などが落ち込んでおり、それを除去していないので正確な深さは確認していない。石材には河原石と花崗岩礫があり、あるいは古墳の石材を投棄したものの可能性もある。

### 出土遺物 (図版12、第21図)

図示した空風輪以外は若干の瓦と染付が出土したのみで、それらは近現代に属するものと思われる。遺構の時期を推測させるものではない。ただ、溝状遺構は新しい遺構であるとの感触を得ている。空風輪は粗雑な安山岩製で、加工成形も雑とってよい。断面形状は正円とならず、最大径部で0.5cmの歪みを有するが、数値以上に不整に見える。残存高約18cm、最大径約12cmである。

## 小 結

南へ緩やかに下降する平坦地という、有利な地形的位置にあるものの、トレンチ幅が狭小であったのが災いしたものか、確たる遺構を検出できずに終わった。溝状遺構に関しても、その位置関係から見て建物を囲繞するというものではなからう。



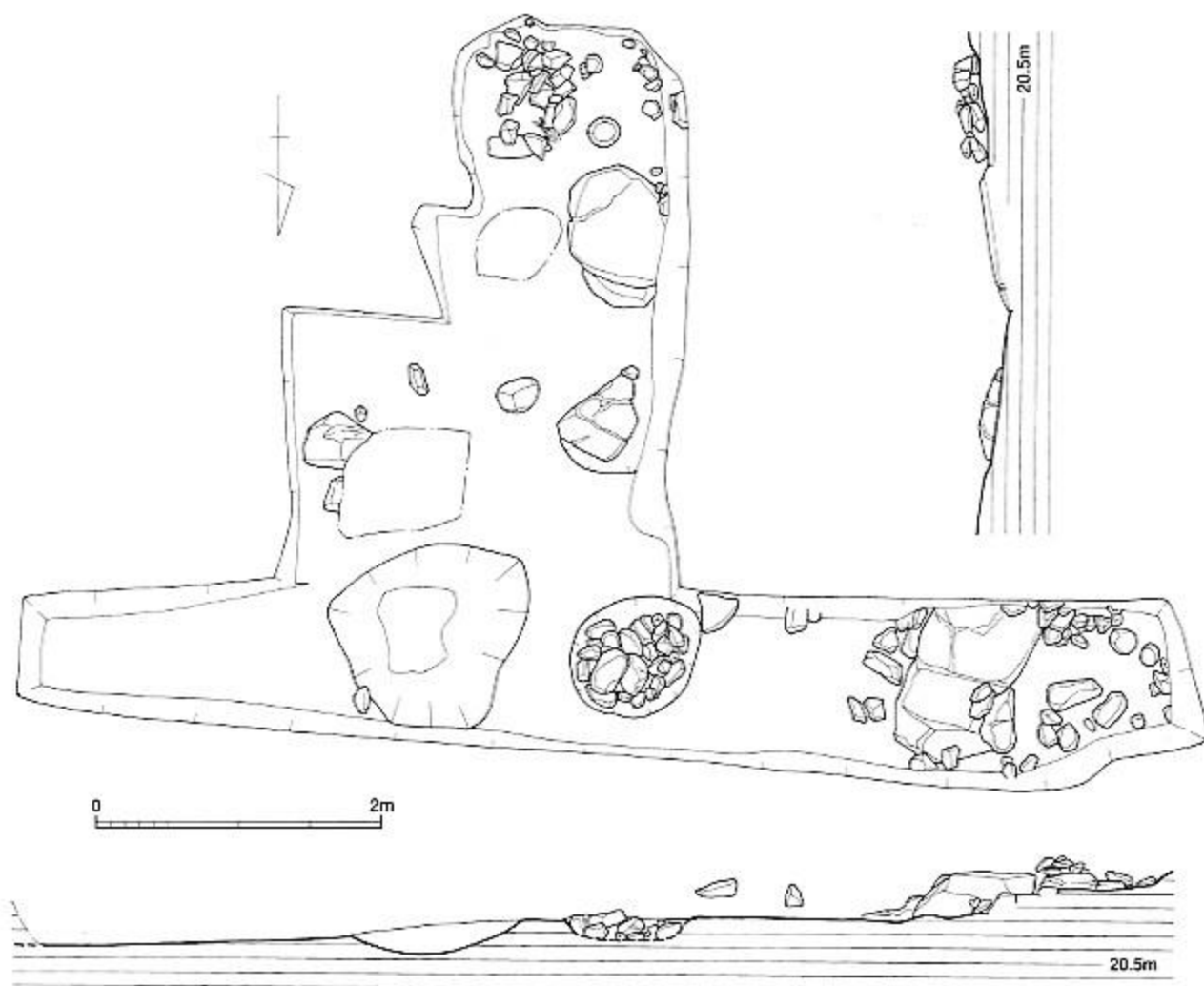
第7図 第2地点土層実測図 (1/60)

### 3) 第3地点 (図版6・7、第8図)

鈴熊山の東側山林部には2~3段の平坦面が存在するが、その下位に位置する。当初の園路コースであったが、礎石建物らしきを検出したことでコースを変更することとなった。また、この調査を契機にして通常の記録保存ではなく「保存のための調査」という位置付けを強く打ち出し、国庫補助事業に申請することとなった。調査面積は約18㎡である。調査区は孟宗竹林で、発掘面積が狭小とはいえかなりの労力を要した。

表土中に大量の瓦や磁器類が混入していたが、中には明らかに近現代に属するものもあり、社寺の屋根葺き替え等に伴って廃棄されたものと思われる。地山に達したところで一部石組を伴う土坑、それに花崗岩の礎石を思わせる石材がほぼ等間隔に現れ、礎石建物を期待したが、花崗岩礫は地山に含まれる大型石材の露頭であり、結局顕著な遺構を見出せずに終わった。

石組状の集石を伴うピットは、直径0.7~0.8m、深さ0.2m前後の規模で、浅い半球形の掘形内に花崗岩・安山岩らしい石材の拳大からハンドボール大程の塊石が集積する。隙間なく平坦に合わすような詰まり方ではないが、上部に礎石が乗っても不思議でない。塊石以外には土師器小片や瓦器小片が



第8図 第3地点遺構実測図 (1/50)

若干含まれるものの、工事による掘削が及ばない部分であることから、底面まで完掘しなかった。

### 出土遺物

地山面までの深さ30~40cmの間で大量の瓦や土器を出土した。大部分は近現代に属するものと思われたが、それも含めて一部を図示した。

#### 土師器（第9図1~3）

1は口縁部を大きく匙面状に膨らませるもので、胎土は比較的精良である。内面は丁寧に横撫でされ、外面くびれの下位以下は篋削りが観察できる。内面が灰黄褐色、外面は暗灰色に近い色調を呈する。ほかの同形態の土器では外面に煤の付着が顕著で、鍋と思われる。2は口縁部を内側へ巻き込む形態の鍋。口縁端部に弱い面取りを施すようである。内面は丁寧に横撫でされるようだが、あるいは篋磨きで処理されているかも知れない。外面では口縁部のやや下位から篋削りが施され、いずれの調整手法も丁寧なものである。胎土は1に似て、内面は暗灰黄褐色、外面は灰褐色を呈する。また、外面は全面に煤が付着する。3は口縁部を外反させて断面方形に近く成形するもので、外見はタガを付したように見える。胎土は1・2に比して精良で全面が明黄褐色を呈する。体部内面は丁寧な篋磨き、同外面はやはり丁寧に篋削りで仕上げる。なお、篋削りが施された部分以上の口縁内面の一部に煤あるいは焦付きが見られる。

#### 須恵器（図版11、第9図4~6）

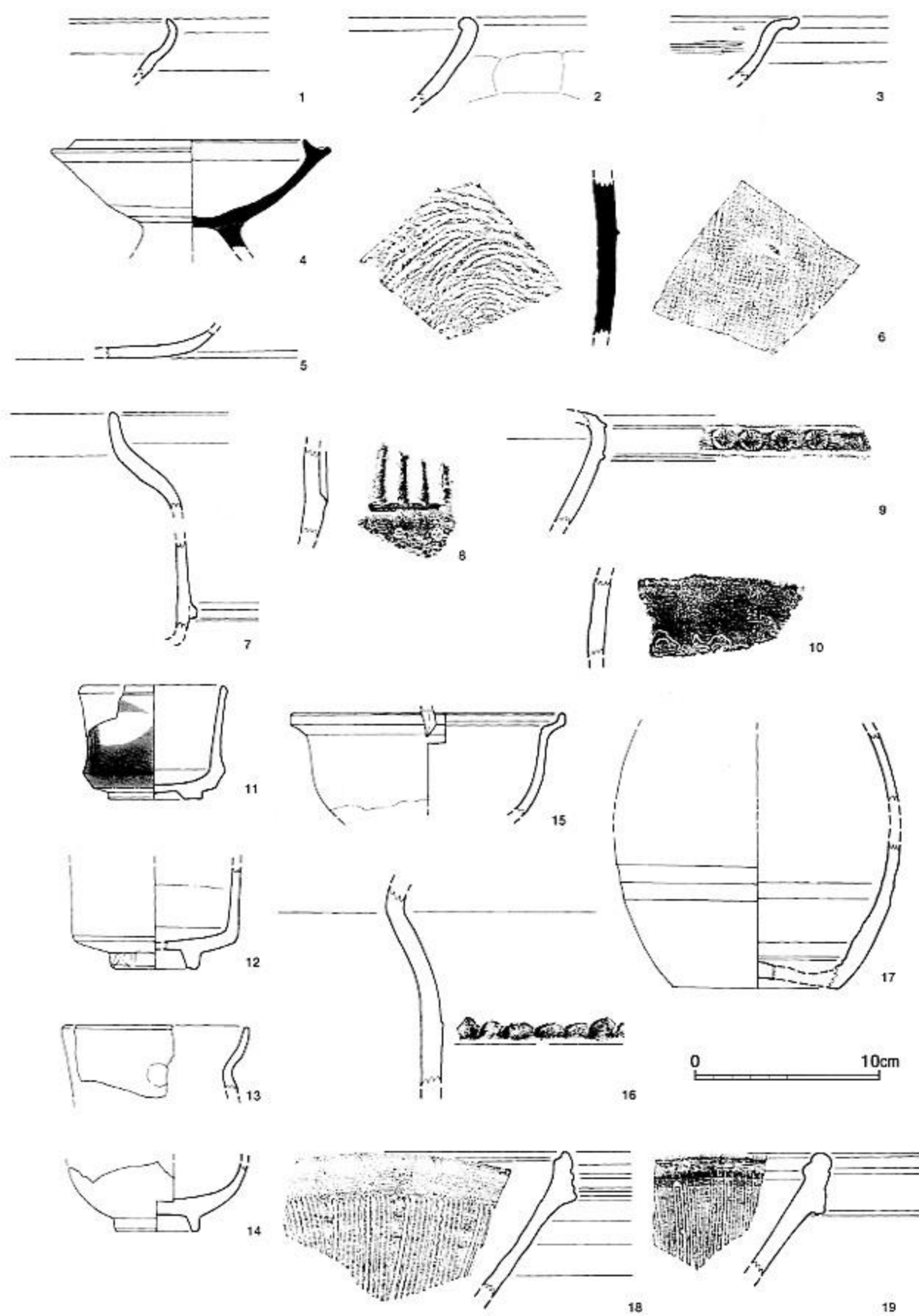
4は有蓋高杯で、杯部は完存に近い。全体に雑な横撫でで調整し、焼成も甘い。5は杯であろうか。これも焼成不良で器表が荒れるが、外底面・体部外面ともに篋削りが見える。内面は丁寧に撫でて仕上げる。6は甕の小片。外面に浅い平行叩き、内面にシャープな同心円文当て具痕が見える。また、外面には円形に焼成時の熔着痕があり、垂れた黒色の自然釉がそこで止まる。

#### 瓦質土器（第9図7~10）

7は接合し得ないが明らかに同一個体の茶釜。口縁部は直立に近く、端部は明瞭な面をもたない。肩部の張りは小さいようで、寸胴と思われる体部へ続く。体部の突帯は底部に近いようで、断面方形に近く形状は整っている。胎土は精良で、器肉は暗灰色、器表は全体に灰褐色~灰黒色を呈し、調整は雑な横撫でを主体とする。8は器肉が灰黄色、器表が灰黒色を呈する。口縁部を欠くが、図上端ではほぼ完結するものであろう。甘い突帯で画した間に菊花文のようなスタンプを飾る。器表が荒れていて調整痕ははっきりしない。9は天地不明。内面を丁寧に横撫でで、外面を篋磨きで仕上げ、そこにスタンプを配する。器肉は灰黄褐色、器表は内面が暗茶褐色、外面が黒色を呈する。

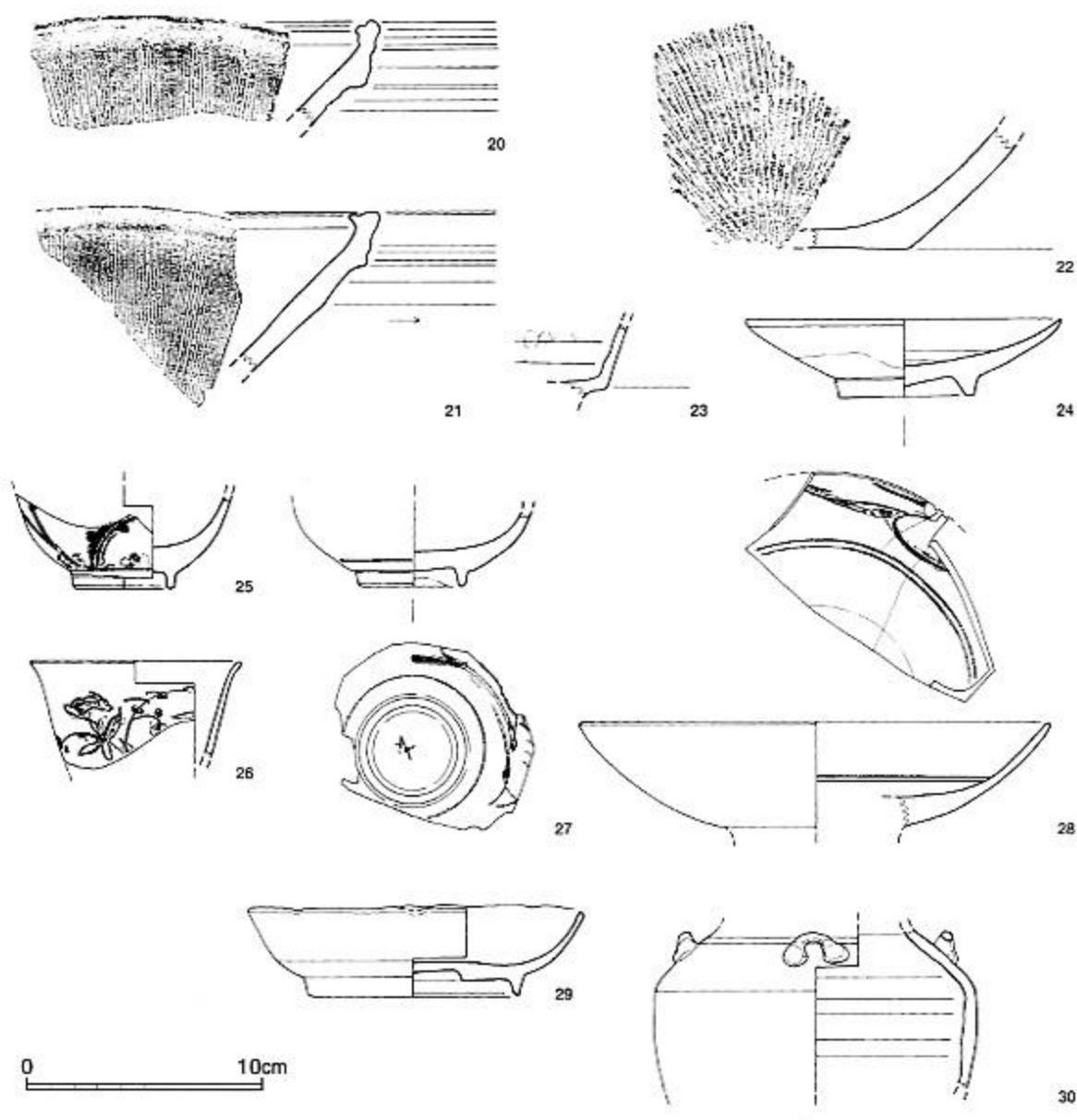
#### 陶器（図版11、第9図11~22）

11は腰が二段となる椀で、下段から高台にかけて釉を削り取り、高台も削出す非常にシャープな造りである。地は濃い緑褐色で、半円形に乳濁色部分をもうけてやはり地と同じ釉で施文する（楓の葉か）。器肉は暗灰色、露胎部は灰黄褐色となる。12は瓶であろうか、内面下半が露胎となる。腰折れとなる部位直上と残存部中位に淡い濃緑褐色釉を用いて圏線を各1条付し、その他は暗灰色不透明釉を掛ける。高台は削出しのようで、基本的に高台内外面は露胎を意識している。器肉は暗灰色、露胎部は赤紫色に近く発色する。13は胎土が灰黒色に近く、緻密さを欠くなど先の2点と明らかに異なる。外面に青系統の色調の圏線を4条めぐらせるが、色相が各々異なり、図文の発色も同



第9图 第3地点出土遗物实测图1 (1/3)





第10図 第3地点出土遺物実測図2 (1/3)

様である。なお、一部が小指大の大きさと大きく窪むが意図的なものと思われる。14は総釉のようで、甕付全体に土目痕が付着する。地が黄味強く斑に、文様も灰緑色～黒褐色に近く発色し、かつ釉が流れて文様の判読も困難である。素地が灰黄色の唐津と思われるもの。

15は口縁部を受け口状とし、取っ手を付したようである。茶色の不透明釉を掛け、外面下位は露胎となる。露胎部は篋削りが観察でき、灰赤色に発色する。16は指押さえて扁平化した突帯を付すもので、造りが丁寧である。器肉は灰赤色、器表内面は露胎で灰茶色、器表外面は釉を施して内面よりやや白濁化した色相となる。17は赤褐色に焼き締められた徳利形の瓶で、一部が光沢を有する。体部下位に幅広い凹線が付され、それ以上は浅い幅広いカキ目状の線が見え、以下は撫でて調整される。底部は篋切り後に横撫で調整されるようである。大きく焼け歪んでいる。

18～22は摺鉢。いずれも赤色系に発色するが、18は口縁部外面が黒紫色様に変色し、21は器肉は明赤色を呈するものの器表近くが層状に濃く変色し、内外面が光沢を有する。18は5点の中では最も胎土が粗く、肥厚部の変色を見ても古相を示すものである。肥厚部外面に3条の沈線を刻むが、上段が最もシャープで、下位へ行くほどに甘くなる。口縁部は内側へ小さく突出させ、その下を横撫でした後、櫛目を刻す。全体に丁寧な横撫でで調整する。19は2条の凹線を刻むが、もはや甘くなり、口縁部内面は凹線を刻んで突出部を強調する。櫛目は突出部直下から刻むが、その上端は撫で消される。体部外面は丁寧な篋削りで仕上げるようである。20は肥厚部外面に2条の凹線を刻み、口端部内面も窪ませて内側へ引き出す。21は肥厚部外面の凹線が不明瞭で、口縁部内側が鋭く突出する。ここでは体部下半に雑な篋削りが見える。22はやはり赤色に焼かれた摺鉢底部。先の4点とは別個体のようである。櫛目は深くシャープで、体部外面・底部ともに横撫で調整のようである。

#### 磁器（図版11、第10図23～30）

23は白磁であろう。体部下半の小片で、内面は露胎。素地は灰白色、釉は青味帯びる乳白色不透明で、露胎部は赤味帯びる灰黄色に発色する。24も白磁の皿で、高台部は完周する。体部上半から内面にかけて施釉するが、見込みは幅2.5cmほどの幅で蛇の目状に掻き取る。素地は純白で、露胎部は赤味帯びる灰黄色となる。高台の一部が焼成時にひび割れるが、非常に丁寧に造られている。国産と思われる。

25～29は染付。25・27はいわゆるくらわんか碗。25は地が乳白色、文様が明るい空色に鮮やかに発色していて、27に比してとてもよくできている。高台畳付を除いて総釉で、畳付は橙褐色に発色する。高台内にも施文されるが、文字・記号かはっきりしない。27も畳付に土目が付着する。焼けむらがあって地がやはり黄味強く発色するが、文様はまだ青味を保つ。素地は先の2点の中間的である。

28は皿。見込みの釉を掻き取った跡が見え、地は黄味帯びる乳白色、文様は緑を帯びる灰青色、圏線は灰青色に発色する。これは非常に上品である。

26は猪口で、地には灰白色不透明釉が付され、施文は描線が黒褐色に近く、塗が暗青色に発色する。丁寧に造られている。

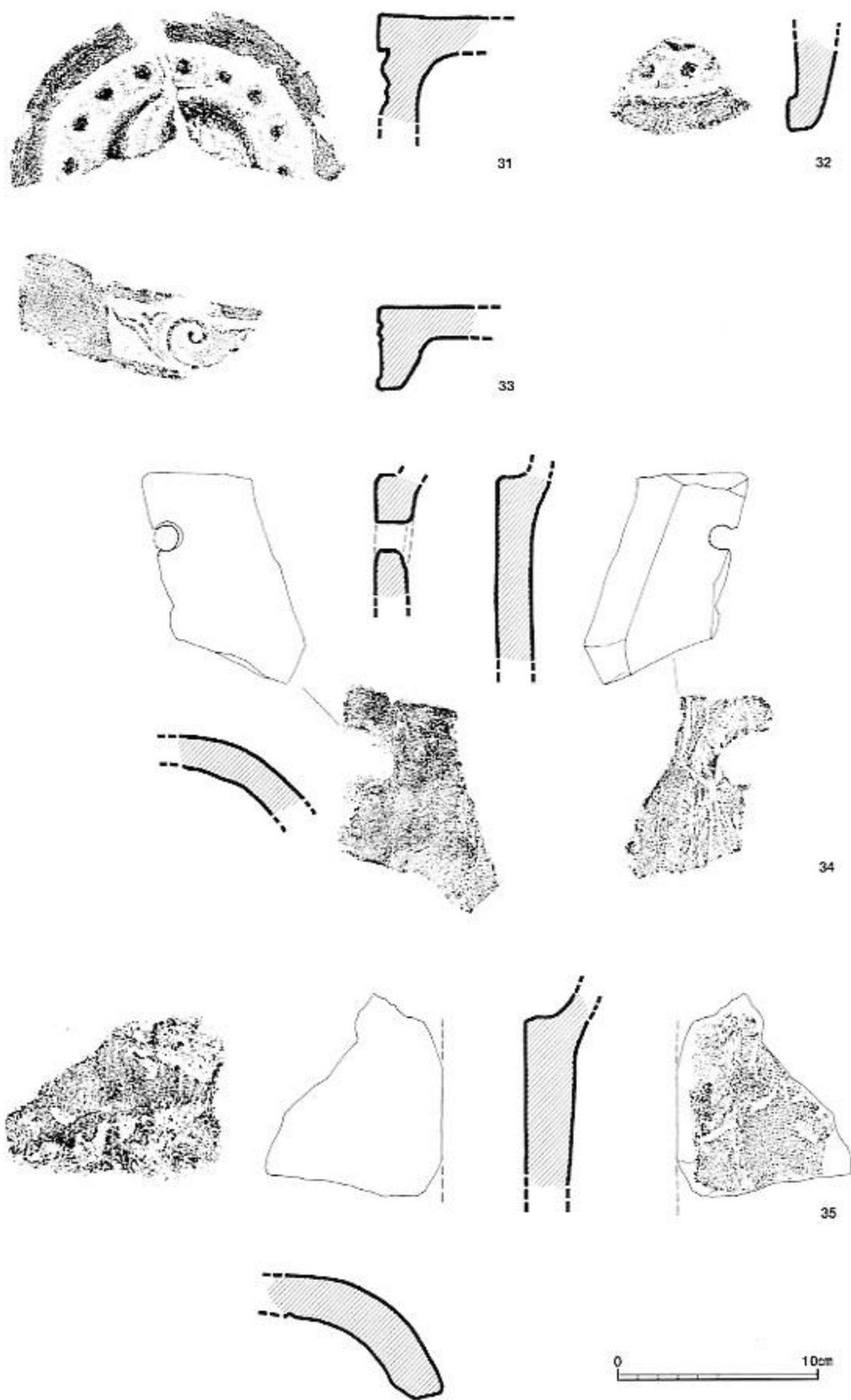
29は口端部を10ヶ所ほど小さく窪ませて輪花とする皿で、高台内面と蛇の目状の部分だけ露胎、外底面中心部と高台畳付から外面・内面全面に釉を施す。内面全面を型紙摺の幾何学文・花文で埋め、外面にも同じ手法で連珠文を3単位付す。文様は濃青色、地は乳白色で、施文時の汚れが甚だしい。造りが雑な皿である。

30は外面に焦茶色の餡釉を掛けた耳付壺で、内面は露胎で黄白色となる。素地は灰白色。

#### 瓦（図版12、第11図31～35）

31は巴文の軒丸瓦で、瓦頭上半のほぼ1/2が残存する。器肉は大部分が黒色を呈するが、器表近くの表層のみ灰黄色となり、器表は灰黄色～黒色となる。唯一残る巴のくびれ部はシャープである。外縁と瓦当面の高さがほぼ同じで、内区外縁の圏線を欠く。32も巴文であろう。下端の小片。焼成が甘いのか、器肉・器表ともに灰黒色となり、表面近くはやはり灰白色の層状に変色する。

33は唐草文軒平瓦で、これも器肉が灰黒色、器表近くが灰黄褐色に層状に変色し、器表は灰黄褐色～灰黒色となる。器表が荒れているが、顎裏面の部分に撫でが見える。唐草は躍動感をもつ。



第11图 第3地点出土遺物実測图3 (1/3)

34は釘穴の残る丸瓦で、図上端は玉縁部が折損する。孔は径15cmで、焼成前に凸面側から穿つようで、凹面側に大きな剥離が見られる。凹面に細かな布目が残るが、凸面は丁寧に撫でられるようで、整形時の痕跡は見えない。なお、器肉は灰黒色、器表は灰黒色?灰黄色となり、表層がやはり灰黄色の層となる。35も玉縁の丸瓦で、やはり凹面に布目痕、凸面には顕著な痕跡が見えない。これは側縁が残存し、不連続な削りが残る。これは器肉・器表ともに黄褐色を呈する。

#### 打製石斧 (図版12、第21図3)

表土から出土した安山岩製の打製石斧。身中程で折損するが、残存長6.5cm、最大幅4.6cm、厚さ1.3cmを測る。表面が磨滅し、剥離痕は不明瞭である。

## 小 結

調査区北部には、上部に礎石が乗ってもおかしくない根石に似た集石をもつピットがあり、礎石建物の存在を考慮する必要はあろう。ただし、調査区域内ではこの根石状集石に対応する相応な遺構はみられない。地山にみられる花崗岩露頭を利用した柱の配置であれば、東西・南北方向に直線的に並び、付近に出土する瓦類などの遺物と関連する施設があった可能性も現状では捨て難い。

打製石斧を除く土器類の中で明らかに遡るものは須恵器高杯で、およそ6世紀後半に比定してよからう。次いで4に図示した須恵器杯かと思われる残片が8世紀代に属しよう。ほかはいずれも中近世に属するものである。すべて遺構に伴うものではなく、表土層から雑然と出土しており、個々の時期比定は困難であるが、瓦質土器類が14世紀代に遡る可能性がある。陶磁器については18の備前摺鉢が16世紀後半に比定されるほかはいずれも近現代に属すると考えられる。

瓦については類例が乏しく、判然としない。第4地点出土瓦が中世に遡ると考えられることから、細かい布目痕をもつ本例にもその可能性はある。

## 4) 第4地点

第3地点で園路の設計変更を行った結果、新たに園路が設定された地点である。現鈴熊寺本堂と第3地点の間のテラスに位置する。南西隅、東参道下に3×2mの浅い掘り込みがあり、泉池を思わせた。ここでは3本の試掘溝、計約85㎡を発掘した。この結果4-b地点で、地山地業らしい部分が一部みられたため、平成9年度に西側隣接地に約15㎡のトレンチを設定して追加調査した。

### 4-a地点 (図版7・8、第12・13図)

大部分が客土によって造成された平坦面である。南北壁面の土層図を図示した。

北壁ではその西端でバイラン土が一部に現れたが、そこからかなりの傾斜で下降して行く。バイラン土上面(標高24.5m)付近で平坦面があるようだが、同じ土層が南壁では傾斜していることから、これが整地された面とはいいがたい。

南壁では試掘溝中央西側でバイラン土の地山が急激に落ち、最深部で1.6mまで掘り下げたがバイラ

ン土を確認できなかった。その中位、標高24m付近で平坦面が形成されるようで、トレンチの東端付近で還元された青灰色の安定した土層が観察できた。ただ、発掘範囲が狭いこともあって、この範囲で遺構は検出できていない。また泉池状の落ち込み内では表土直下でバイラン土が現れ、顕著な堆積層はみられなかった。

なお、平面図に記した柱穴は表土下で検出したもの、落ち込みは堆積層の西限を示す。

#### 4-b地点 (図版8・9、第12図)

ここは表土下で全面にバイラン土の地山が現れた。また、北半では中央に巨大な花崗岩が存在する。柱穴・土坑状の落ち込みを若干検出したが、建物跡等を想定できるものはない。また先の花崗岩を覆う建物も想定しがたい。

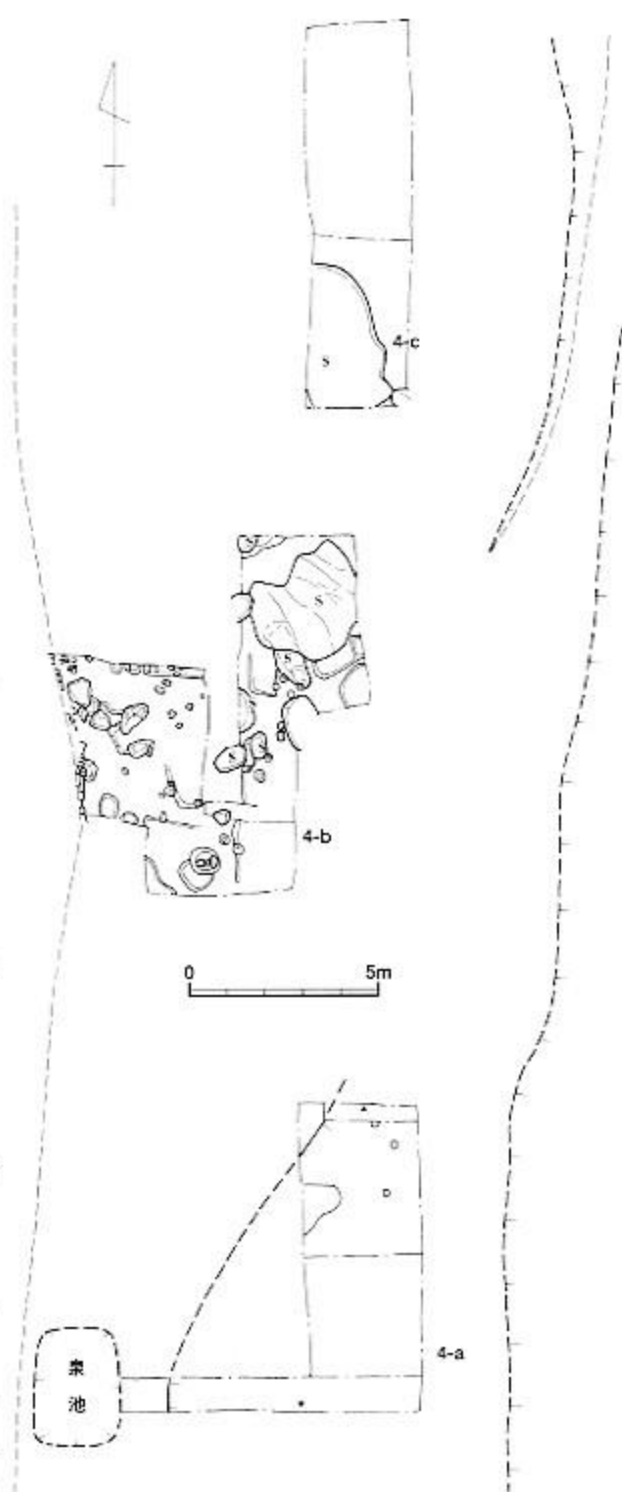
2次調査区では、西側の崖にみられる石垣石積みの基底部は花崗岩岩盤の露頭に直接乗り、その前面側は地山が削り出し状の平坦面をなし、約0.1mの段差がある。この段差の堆積土を観察すると部分的に貼り床のような粘土質堆積土がみられるものの、明確な盛土整地面ではなく、柱穴状ピットも建物を想定できるような柱穴配置でなく、浅い。散在する塊石も地山にみられる露頭と浮石で、建物跡を想定しがたい。

#### 4-c地点 (図版9、第12図)

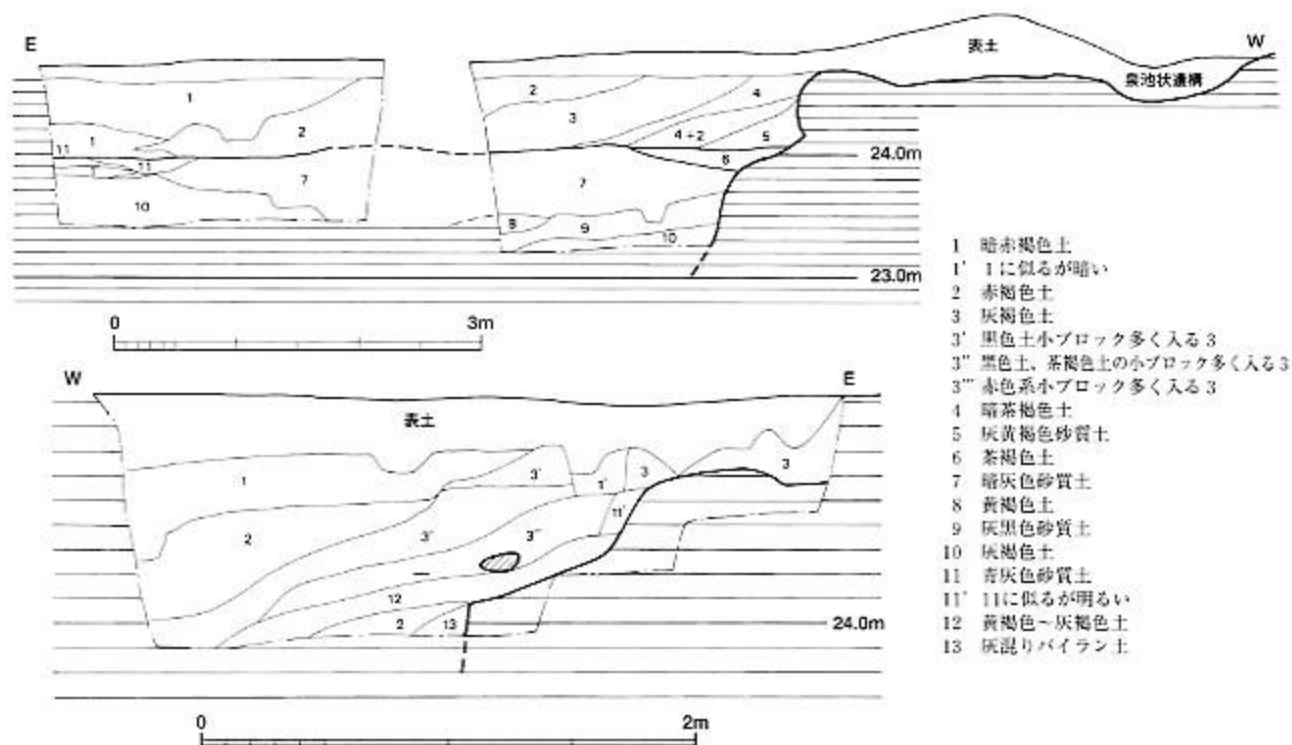
ここも南半で花崗岩の巨石が表土直下で現れた。それを避けて北半をさらに掘り下げたが、標高23.9mの深度でまだバイラン土は現れていない。ちなみに花崗岩の上面は23.9~24.3mの標高となる。この花崗岩がさらに巨大なものであり、テラスのほぼ中央部位に位置することからこの周辺にも建物跡は想定しがたい。

#### 出土遺物

南端に開けたトレンチ出土資料を図示した。1~5・12・14は表土、6~8・15が<sup>s</sup>上層、9~12が<sup>g</sup>中



第12図 第4地点遺構配置図 (1/200)



第13図 第4地点土層実測図 (1/60・1/30)

層、13が下層出土である。

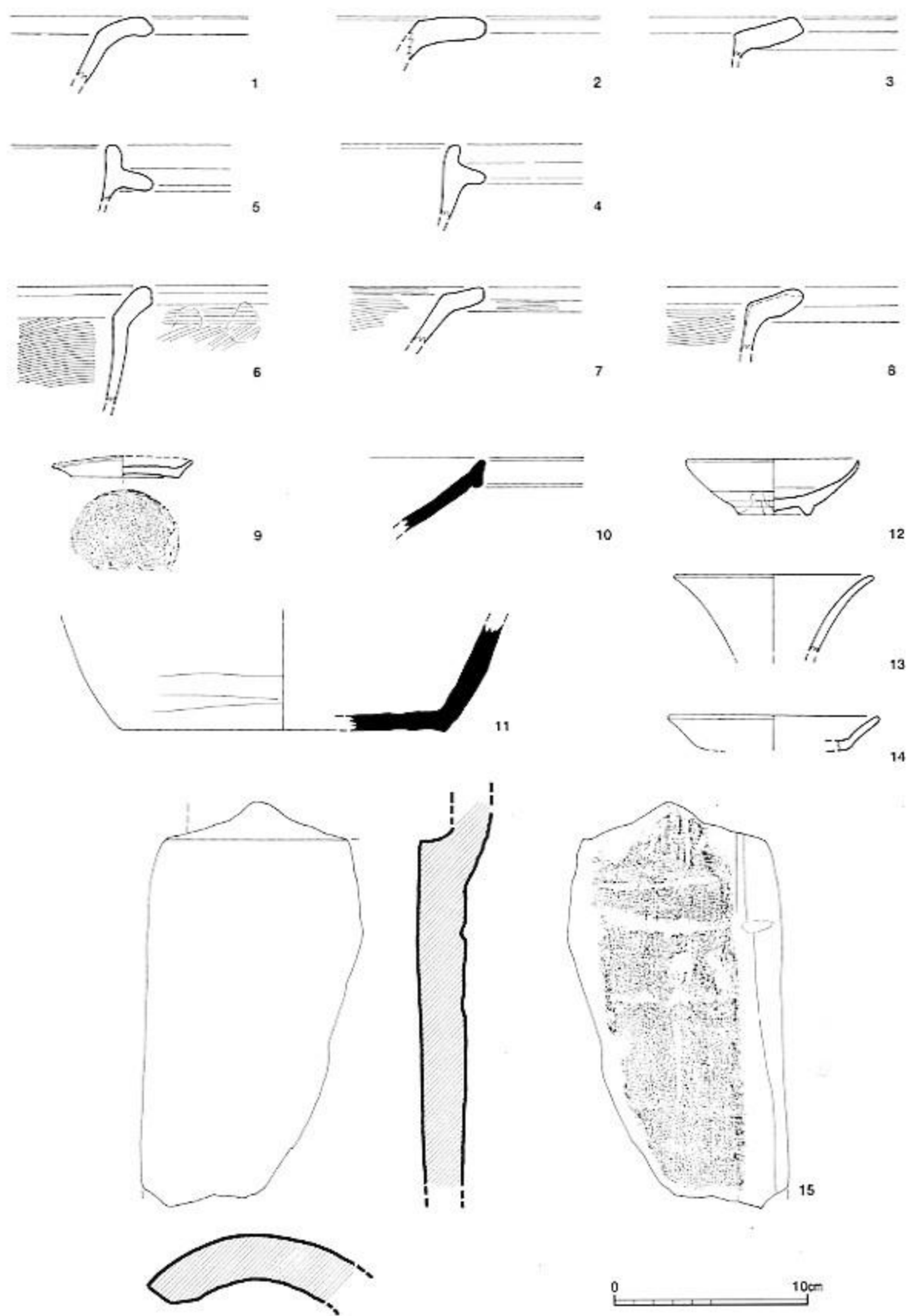
#### 土師器 (第14図1～9)

いずれも鍋類の小片である。1は口縁部が外挽するタイプで、頸部内面に弱いがはっきりとした稜をもつ。調整痕ははっきりしないが、体部内面のそれはごく丁寧である。全体に赤味帯びる黄褐色を呈し、体部外面に煤が付着する。2は口縁部が直線的に外折するもので、肉厚となる。これも調整痕はよく見えないが、外面全体に煤が付着。色調は明黄褐色となる。3は口縁部が内彎気味に外折するもので、頸部外面は強く横撫でされて窪む。内面は全体に灰褐色となるが、外面は燻されたようで灰黒色に近くなる。頸部内面の稜は非常にシャープである。

4・5は羽釜。4は口端部が水平の弱い面をもち、5ではそれがやや内傾したものとなる。また、5では鈔の下面以下に煤の付着が顕著である。

6は口縁部に強く横撫でを施して面を付すが、上端におよばないために段を形成する。頸部外面には指押さえを加え、くびれが弱い、同内面の稜線はシャープである。体部内面・口縁部外面に刷毛目が顕著で、体部外面には厚く煤が付着する。灰褐色～暗褐色となる。7は口縁部が内彎気味にのびるもので、体部の傾きが浅くなる。調整は刷毛目を多用するが、体部外面でははっきりしない。内面が灰褐色、外面は灰黒色に近い。8は器表が非常に荒れる小片。赤褐色となる。

9は1/2強が残存する小皿で、二次的な火熱を受けて部分的に変色するが、基調は黄褐色である。ややいびつになるが、立上がりがシャープで、底部との境も鋭い稜が付く。外底面に回転糸切り痕が残り、内底面では外周に強い横撫でを付している。



第14图 第4地点出土遗物实测图 (1/3)

#### 須恵器 (第14図10・11)

10は口縁部外面のみが濃く変色する東播系の摺鉢小片。全体に丁寧な横撫でで仕上げる。11は壺で、高台を欠く体部下端に篋削り痕が残り、外底面には指頭痕も見える。胎土が粗く、焼成も甘いようであるが造りは丁寧である。

#### 陶器 (第14図12)

口縁部の大部分を欠くが、体部下半は完存する。釉は乳白色不透明。施釉は雑で、基本的に高台とその内部は露胎、見込みは蛇の目状に掻き取っている。また、見込みの掻き取った部分付近に砂が多く付着する。あるいは焼成不良の国産白磁か。

#### 磁器 (第14図13・14)

13は青磁瓶の小片。釉は灰青色のくすんだ感じに発色するが、丁寧に造られたものである。国産と思われる。14は見込みに櫛歯文の一部が残る同安窯系青磁の皿小片で、釉は灰青色に発色する。

#### 瓦 (第14図15)

玉縁を有するものだが、非常に遺存状態が悪い。側縁に2面の篋削り痕が残る。凸面にはかろうじてそれと判るほどの縄目叩きが残る、凹面には横位の縦じ合わせ目が深く刻された布目痕が見える。器肉が灰黒色、器表とその表層が黄白色?黄褐色となる。

#### 砥石 (図版12、第21図4)

b地点表土から出土したもので、緻密な暗灰色粘板岩製。背面および図左・下部を欠損し、残存する使用面にも剥離が多く見られる。無数の条線が見える。

## 小 結

トレンチから出土した遺物は1の土師器を除いて上層・下層出土の鍋類に顕著な変化はみられず、また表土以外の整地層(造成盛土中)出土遺物に明らかに時期差を有するものもみられない。したがって、この平坦地造成は鍋類が使用された直後の時期になされたものとしてよかろう。これらの内、1はおよそ8世紀代に位置づけられるが、その他の鍋・羽釜類はほぼ14世紀代に想定されるもので、土師器は口縁部が肉厚となって外折する点に特徴がある。土師器皿・東播系摺鉢もほぼ同時期あるいは若干遡る13世紀後半代に比定できる。また、丸瓦も凹凸面の成形痕などが太宰府金光寺出土品に似ており、13世紀後半～14世紀に作製されたものであろう。

かなり広範に開けた調査区内では、残念ながら建物跡などの顕著な遺構を確認できなかった。しかし、この地区の本来の地形がb地点付近の狭小な平坦面を除いて急落する傾斜地であったらしいことから、造成は平坦地の確保、居住空間の拡大を目指したものと考えられる。この地点がどのような性格のものであったか、残念ながら今回は確認できなかった。将来に期したい。

## 5) 第5地点 (図版9・10、第15図)

第3地点と同じテラス面、東参道を挟んで南に設定した地区。表土下0.2mほどで堅致なバイラン